

---

**泣かなくていいんだよ ( ぼくたちは 交われないんだから )**

華帆早輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

泣かなくていいんだよ （ぼくたちは 交われないんだから）

### 【Nコード】

N5791C

### 【作者名】

華帆早輝

### 【あらすじ】

切なさを追求した姉弟物語の短編集。お題をタイトルとし、切なくも美しい悲恋物語を目指しています。

【泣かなくていいんだよ　（　ぼくたちは　交われないんだから　）】

小さな白い花が小脇に咲いた、小さな公園のブランコに君が蹲るよ  
うに座ってた。

「昔ね」

ぼくの方を見上げない。

一日中暑い日の光を浴びすぎて少し焼った白い花に語りかけている  
ようだった。

「空と大地は恋人同士だったんだって」

突然何を言い出すのかわからず、ぼくは君の視線に合わせ、さつき  
より少し潤った白い花を見つめていた。

「大恋愛の末に太陽も、月も、雲も生まれた。しばらくはみんな幸  
せに暮らしてたんだって」

俯きながらも微かに微笑むのが君の声でわかっていった。  
泣きそうなほど、微かな笑顔だと…。

「でもね」

君の声が震えたのを気付かずにいようとしていた。  
もう、結末は、わかってる。

「今はもう、口もきかないんだって。お互い。大好きだったのに。  
何故だかわかる？」

君はもう、ぼくじゃなく、花たちに語りかけている。

いや、と花に代わって答えてみた。

「太陽と月が、恋をしちゃったから。お互いをね…。以前の大地と  
空の様に、お互いを愛しちゃったんだ」

悲しそうに、寂しそうに、君は語り続ける。

小さな白い花たちは夕暮れの風に吹かれ、君の話に切なそうに相槌

を打つ。

私達も全てわかってるよ、そうぼくたちに言ってるよ。覚悟を決めて来たばくでさえ、心が痛くなってくる。

「空は泣き出した。大地は激怒した。止まない雨と、止まない地震で、世界は壊れそうになったんだ。

ただ一人…。雲がね。

雲が世界を助けようとしたの」

そう言くと、君は初めて顔を上げ、オレンジの日に照らされピンクに染まる雲に手を伸ばした。

一筋そつと流れた涙を拭いもせずに。

「もうやめてくれ、って。苦しいよ、って。叫んだんだって。

でも、空も大地も聞いてくれなかった。

それを見た太陽と月は、自主的に離れ離れになったの」

わざと明るく言い、君は上げていた手をブランコの鎖に絡め二筋目の涙を流した。

「お互いを見ていたら恋しくなるから、永遠に交われない様に離れたの。

そしたら空と大地は静かになったんだって。もうこの話をしないように、お互いに口をきかなくなっ

ても、今度は…雲が泣き出した。

壊れてしまった家族を思っ

かなしすぎる結末を迎えた兄と姉を思っ

「キヤー！」

嬉しそうに叫びながら弟がまだ少しおぼつかない足取りで、遊んでいた砂場から君の側の白い花へと走ってきた。

今にも花たちを潰しそうな弟の手を君は優しく制し、今日はいじめて

ぼくを見つめた。

「わかるよね…?」

涙に濡れた瞳を見つめ返すのは、ぼくには辛すぎた。

愛している瞳だからこそ、一層…。

ぼくは黙って、君がたった今弟から救った白い花を一輪つみ、君の髪にそっと飾った。

「泣かなくていいんだよ。」

君も…彼も」

弟は無邪気に笑いながらピンク色に染まる空を見上げている。

君は涙を拭い、聞いた。

「約束?」

「約束」

ぼくは答えと共に、そっと最後の口付けを君の髪の白い花に落とした。

「帰ろう」

君は小さく頷き、弟の手を引き、ぼくたちはゆっくり公園を後にした。

\*\*\*\*\*

【泣かなくていいんだよ） ぼくたちは 交われないんだから（）】

お題提供：あお様（<http://houka5.com/333>）

【雨のなかで泣きたかった、君にみられたくなかったから】

あれ以来君はぼくから逃げ出した。

「逃げる」と言うのは間違っているかもしれないけど…。

君の決断を実行した。そういうことだろうか。

この年になって同じ部屋で寝るなんて確かに変だったのかもしれない。

でも、君はどうして、離れることを選んだのだろうか。

今更ながら後悔する。

「約束？」

君の悲しみを写す目が、澄みすぎていて、

「約束」

ウソはつきたくないと思わせた。

今更ながら気になってくる。

君のあの例え話は、どこから出たものなんだろうか？

友達に何か言われた？

テレビで何かを見た？

新聞で何かを読んだ？

ぼくたちはあのまま秘密の中で愛し合っては…ダメだったのだろうか。

弟が…親が…傷つくことを避けて、ぼくたちも傷つくことを避けて…。

ダメだったのだろうか。

コンコンと、ノックの音がした。

「開けていい？」

君の声。

優しい優しい君の声。

愛しい愛しい君の…。

もう名前も呼んでくれないのだろうか？

答えたら声の震えがバレそうで、ぼくは何も言えなかったんだ。  
君を見たら涙がバレそうで、開けようともしなかったんだ。

返事がないからか、君はそれ以上留まらず、どこかへ行ってしまった。  
た。

どこか遠くへ。

ぼくの元ではない、どこかへ。

本当はね、会いたかった。

君からぼくの元を訪れたこの瞬間を大事にしたかった。

でも、そしたらきつと抱きしめちゃうから。

今日、今のぼくは、抱きしめちゃうから。

君との約束…破ってしまうから。

ごめん。

ごめん。

ダメな弟で。

少し開いた窓から夜空を見上げる。  
天の川がゆっくり流れている。  
一年に一度の再会……。織姫も、彦星も、幸せだということとはちやんとわかっているのだろうか。

今夜が雨ならよかった。

君に涙を見せずに、些細な夜のデートに誘えたかもしれない。

「さつきは開けなくてごめん。どうしたの？」  
って、濡れた笑顔で聞けたかもしれない。

「ううん、なんでもないの」  
濡れた笑顔で、君は答えただろう。

\*\*\*\*\*

【雨のなかで泣きたかった（、君にみられたくなかったから）】

お題提供：暖音 様 ( <http://houka5.com/333/> )

【花を抱きしめ君を想うこの夜を君は見てる？】

台所に花束が置いてあった。  
真っ黄色な向日葵の花束が。

誰から？と夕飯の支度をしている母に聞いてみた。

「ひ・み・つ」

と、意味ありげに微笑みながら教えてくれない。  
なんなんだ、もう。

と、その時君が台所に顔を出した。

「お母さん、何か手伝える…？」

と言いかけ、ぼくの姿に目をとめる。

あ、とお互い小さく声が出る。そして、目を逸らす。

母は何も気付いていないみたいだった。

むしろ、今までのの方が心配だったかもしれない。

年頃の姉弟は逆にこう、少しお互いを無視している方が自然なのかもしれない。

「あら、丁度良かった！ この玉ねぎ切ってくれる？」

「うん…」

ぼくの前を横切り、流しに立つ母と並ぶ。

スルツとなびいた髪をぼくの鼻先に触れさせながら…。

たったそれだけのことで、ぼくの胸は痛いくらい締め付けられる。

あの髪は、ぼくの物なのに。

毛先に指を絡め、笑い合った日はそう昔のことでもないので。

でもぼくたちの間には、あの白い花が立ちはだかる。

もう、夢の中でも行つことのできない、恋人専用の行為が蘇る。

ぼくの斜め前でトントントンとリズムカルに動く肩に合わせ、君の髪が揺れる。

約束を忘れて、もう一度：触りたい。

耐え切れず手を伸ばしかけた時、母はそっと君に耳打ちした。

「気付いたわよ、花の事」

「えっ？」

パツと顔を上げ、君はみるみる赤くなる。

ふふふと笑う母を横目で睨み、チラツとぼくの方を見て、真っ赤なまま君はもうとっくに切り終わった玉ねぎを見つめ直す。

なんなんだ？

どうして、赤くなるんだ？

この向日葵が…？

「気付いたわよ」

どういう意味だ？

赤くなる君。

母の言葉。

そして、ぼくの都合のいい想像力。

そうか、この花は君が摘んできたのか。

こんなに大きな向日葵を、両手で、いや、両腕で抱きかかえ、もって帰ってきたのか。

こんなに暑い日なのに、重い思いをして、君とぼくの一番好きな向日葵の花束を…。

愛しい。

そんな可愛い君が、愛しい。

これ以上君の側にいたらどうにかなりそうで、ぼくは一先ず台所を離れた。

夜。

家がシンと静まり返り、みんなが眠っていることを物語る。

ぼくは一人台所に下りていく。

それは夜の暗闇の中、月に照らされほんのり輝いているように見えた。

君は、どうやってもって帰ってきたのだろう。

こうか？

こうか？

色々な抱きかかえ方を試してみる。

傍から見れば変な奴だろう。

君には絶対見られたくない。

けど、愛しすぎる君を間接的に抱きしめられるのなら、そんなことどうでもいい。

「好き」

向日葵の花束をギュッと抱きしめながら、涙でかすれた囁きが夜の闇に消えてった。

\*\*\*\*\*

【花を抱きしめ君を想うこの夜を君は見てる？】

お題提供： 日向 様 ( <http://houka5.com/>  
333 / )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5791c/>

---

泣かなくていいんだよ（ぼくたちは交われないんだから）

2010年10月8日23時40分発行